

「もし生きて帰れたらもう一度 大学へ戻りたい」の遺言を残し 沖縄戦に散った特攻大尉

特攻隊員戦没者の中に 成田市民の名が

8月、あの悲惨な戦争の記憶をよみがえらせ、そして不戦と平和への誓いを新たにす慰霊祭が広島、長崎をはじめ各地で行われる。

戦後半世紀を越え、成田市戦没者の家族も高齢化し、その痛みや悲しみも遠い日のことになりつつある。

その中で河野曠遺族会会長から昨年、市民旅行で薩摩半島の知覧特攻平和会館を見学した折、「千二十八柱の特攻隊員戦没者の中に、成田市出身の人がおられますか」と尋ねたところ、「一人あります」という答えが返ってきた驚きと感動の話聞いた。

この話をついて、戦没者と家族の記録を残すのは今、そんな思いの中から、23歳で戦没した飛行第十九戦隊特攻隊員根本敏雄の人生を成田市戦没者九一

根本敏雄(なもと としお)

大正11年大竹に生まれる。法政大学在学中に自ら志願して軍人に。戦局悪化の中、特攻隊に編入され昭和20年4月、23歳で沖縄の空に散った。



五柱の遺言と重ねながらたどってみた

国家有用の人材に 登用されよ

敏雄は、大正11年(一九二二)9月16日、成田市大竹317番地1に、父根本牛太郎、母とよの間に五男二女の長男として生まれた。

八生尋常小学校をおえて成田中学(現、成田高校)に進んだ。

成田中学では、第40回卒(昭和16年3月卒)で同期には市内在住の古川英

一、谷武夫らがいた。

学校の成績は優秀でクラスではいつも5番以内に入っていたという。陸上競技部に所属し、4年生のとき、猛暑の練習が過ぎて日射病になるほど熱中した。

一方、学校正科の剣道でも早朝の寒稽古には、下総松崎駅前の自宅から徒歩で成田まで練習に通うという努力家であった。

こうした敏雄は、母校に「卒業を迎えて」の一文を残している。

「校風燦たる不動ヶ丘の学舎に学び

はじめしより五ツ年思えば過去の喜怒哀楽が一大パノラマの如く浮かんで来る。何として有難き師の恩を忘れようか又日毎同じ学窓にありて親しく交じりたる友達を忘れることが出来ようか。況や我が国有史以来未曾有の大戦乱の真つ只中に社会の荒波に棹さす我ら強く立てそして国家有用の人材に登用されよ。終わりに在校生諸子の健康を祈る」(成田中四〇回生記念誌)

当時、敏雄の担任教師であった片山辰雄(後、成田高校教頭)は、「君は温厚柔順、真面目である。父上応召中は後顧の憂なからしむため午後12時頃迄家業の手伝いをした。其の為、過労に陥り生死の境を彷徨するような重態にまでなったが、幸い全快して今日のような健康になった。父上も無事に帰還せられたし重ね重ね結構なことであった。卒業後は鉄道省に奉職したい考えであるとか。副級長一回」と敏雄を評している。



飛行第19戦隊の特攻機「飛燕」

自ら志願して 軍人に

成田中学をおえた敏雄は、昭和16年4月法政大学専門部に入学する。しかし、大学進学時には父も親戚も大反対で、「このあたりで、子どもを大学にやっている家はない、就職するのが一番」と譲らなかった。

見かねた母が、間をとって専門部へ入学することで落ち着いた。

法政大学へ入って在学中、兵隊検査に合格すると、本人は軍人を志願したいと言いつつ、息子の将来を思う母親は泣きながら「戦争に行くことは死にいくこと、死を覚悟してのこと。何でお前がそんなに急いで戦争にいくのか、招集は必ず来るのだから……」と抑えたが、父親は沈黙を守ったままで行けとも、行くなとも言わなかった。

もっとも牛太郎自身、近衛四連隊に



法政大学在学中学友と（手前が敏雄）

入隊、日中戦争を体験し、軍人精神を息子たちにしばしば自慢していた手前もあつた。

とうとう結論は、本人の「志願」で押し切られ母親の悲嘆は大きかった。

昭和18年9月、敏雄は専門部3年課程を半年繰り上げ卒業した。（法政大学調べ）

戦局の悪化で

「特攻隊」が編成される

敏雄は昭和19年度第一期「準」隊を受験、特別操縦員習士官（甲種幹部）に合格、三重県明野陸軍兵学校大邱教育隊に入隊した。大邱は今の韓国内である。

続いて中国の石門の戦場で実戦訓練戦局は一日ごとに激しさを加え、戦闘要員の育成は急がれていた。

次いで、三重県内の明野陸軍飛行学校本隊に戻り、その後、千葉原柏で最初の「特攻隊」の編成が行われ、ここで数日間の訓練を受けた。

この間、自宅の両親、兄弟にあてた敏雄の心境などを知らせる手紙は30通にも達している。（自宅保存）

敏雄は、名古屋の航空基地で「飛燕戦闘隊一九戦隊」特攻隊に編入された。

このころ、日本軍はミッドウェー海戦の敗北から、ガダルカナル島撤退、

サイパン玉砕と敗退を続け、沖繩が日米最後の決戦場となっていた。（大城將保著「沖繩戦」）

戦術も悲壮なものとなり、昭和19年10月から始まった「神風攻撃」（飛行機による体当たり攻撃 特攻）が沖繩戦の主力になった。

飛行機の胴体の下に250キロないし、500キロ爆弾をつけて、片道だけの燃料で基地を飛び立ち、敵軍の中に飛び込んでいく。

雲霧のとき敵機、敵艦の包囲と迎撃にあつて空しく途中で撃墜され、海中に落ちた飛行機も多く、命中率は13%と悲惨なものであった。（藤原彰編著「沖繩戦 国士が戦場になったとき」）

「兄さんの分まで 父母に孝行してくれ」

「敏雄は今台湾の南部屏東に居ります。枕を並べし、幾多の戦友は特攻隊として東京の空に名古屋に。又レイテの海にリンガエンに 散って逝去しました。敏雄のこの六尺足らずの体も今にあの航空母艦と交換してみせませ。きつとやります。」

若鷲の清く散りてぞをしからむ
若人の意気しめさずば体あたり
我々若人で日本は必ず勝ちます
父上様母上様元気に暮らして下さい。

正巳も軍人の子と思つ。立派にお国の為にくしくしてくれ。美智子、兄さんが戦死したら香をたいてくれ、線香はいらぬ。若く清く散って逝くのだ。康正君、公夫君も安じ。この手紙は内地に帰る人があるので依頼する。では折りがあつたら便りを書きます。これが敏雄の遺書となった。

「もし生きて日本に帰ることがあつたら、もう一度大学へ戻って勉強したい」と口癖のように弟正巳に聞かせていた言葉は、もはや念頭にはなかつた。遺言の決行であつた。

戦後、特攻隊員とともに石垣島から出撃し、敵の奇襲で被弾し、出撃できず生還した戦友の田中慶次（奈良県出身）は、敏雄の最期を「昭和20年4月13日17時20分、沖繩の空へ飛び立ったのが、今生の別れでした」と、根本家の玄関に土下座し「自分は生きて帰って申し訳ない」と涙ながらに報告したという。根本敏雄の家族も返す言葉もなくとも手を取り合い、肩を抱き合つて泣いたという。

こうして特攻隊員根本敏雄の23歳の生涯は沖繩決戦に消えた。

祖国と両親、家族のことを案じつつ散華していった戦没者への痛恨と追悼の思いはつきない。

平和の尊さでありがたさをしみじみと思う8月である。（文中敬称略）